



ふるさとの風 霜月

—神秘の儀式 遷御—

受け継がれしもの

～幽玄の終章～

平成二十五年 十月 二日

伊勢神宮内宮において遷御の儀が厳かに斎行された。

翌朝、東の御空に残る有明けの月を眺めた。

濃やかな月の光に照らされた新宮を想い描く。

森羅万象全ての祝福…。

神は確かにお遷りになられたのだ。

遷宮は二十年に一度の至高の祭典。八年にも及ぶ遷宮諸祭の中核となる祭儀が遷御の儀である。そしてこの時、遷宮はクライマックスを迎える。

遷御の儀が行われるのは夜。

浄闇——。神遷しは清らかな闇の中ではじまる。

午後六時、夕闇迫る神域に参進を告げる太鼓の音が響き渡る。

瞬く松明の明かりの中、玉砂利を踏んで進むのは、天皇の勅使を先頭に祭主、大宮司、少宮司、神職、総勢百五十名余り。参道、初種石近くの玉串行事所で手にした太玉串を内玉垣御門に奉納、御正宮中重の席に着く。

次に、勅使が御正殿の階下に進み「新宮にお遷り奉る」旨の祭文を奏上。

つづいて大宮司、少宮司が御扉を開く。

所役の読み上げる召立文に従って、神職たちが御装束、神宝を手にし整列、出御の時を待つ。

午後八時、神域の庭燎（神事の際のかがり火）はすべて消され、浄闇の静寂が訪れる。太古の森を照らすのはわずかな松明、そして月と星…。

「カケコー、カケコー、カケコー」

天の岩戸開きの神話にならう鶏鳴所役の三声が響く。

「出御、出御、出御」

勅使が御階に進み三度奏上。

渡御の列は御神体をはきんで前陣と後陣に分かれる。

前陣は御装束神宝の盾、鉾、弓や「金銅造御太刀」「玉纏御太刀」「須賀利御太刀」などを捧げ持った神職や神楽歌を奏でる楽師が並ぶ。

後陣は祭主が先頭に立ち、菅御笠などの御装束神宝が続く。

御神体に捧げる御装束神宝も古例のままに一新、辛櫃に納められ遷御の儀の前日の川原大祓の儀式で祓い清められる。今年の式年遷宮では従来の白木造りの辛櫃のほか、復古の意味を込めて、昭和四年の

第五十八回遷宮で使用した、朱色や黒色の漆塗りに金飾りを施したあでやかな古来さながらのものも並び、五十鈴川御手洗場近くの祓所は二十年に一度の晴れやかな光景となった。

大宮司、少宮司、禰宜たちに捧げられた神儀（御神体）が純白の生絹を張りめぐらせた行障と絹垣こうじょう きんかいに守られ出御。楽師の奏でる幽遠なる神楽の調べが流れる。渡御の列は「雨儀廊」の下、白い道敷の上を東から西の御敷地へと厳かに秘めやかに渡っていく。それはあたかも浄闇に浮かぶ古代絵巻。

「お—————」

警蹕けいひつの音が重々しく神域に響く。

時を同じくして皇居では「遥拝の儀」が行われる。

神嘉殿南庭しんかてんに特別に設けられた御座に進まれた天皇陛下は庭上下御ていじょうげきよという最も丁重な作法で遥か伊勢の神宮に祈りを捧げられるのである。



「雨儀廊」

午後十時、新宮に御神体が遷り入御。御装束神宝も順次殿内に納められる。

神楽歌が奏されるなか、大宮司、少宮司により御扉が閉ざされる。

その後勅使が、御神体が鎮まれた旨の御祭文を奏上、一同が拝礼して遷御の儀が終了する。

これをもって新宮が御正宮となったのである。

人生で四度目の遷御の儀を奉拝した日本文学研究者、ドナルド・キーン氏は語っている。

この世界に類を見ない神聖な夜の祭儀を「闇夜の軌跡」と私は言いたい。私はこれまで多くの国で祭儀に参加したことがあって、その中には感心したものもあるが、伊勢の御遷宮に匹敵するものはない。

（読売新聞 2013年10月22日より）

遷御の儀が滞りなく終わった翌日は、早朝から夜更けまで新宮において五つの祭が行われる。

午前六時、遷御ののち初めて大御神おみけに大御饌を奉る「大御饌」の儀。

祭主、大宮司、少宮司、神職が参列し瑞垣御門の前に御饌を供え、大宮司が祝詞を奏上する。

午前十時、遷御に際して天皇陛下から奉られる幣帛へいはくを勅使が奉奠する「奉幣」の儀。

古来、“一社奉幣”と称され遷御とともにひときわ重んじられた祭儀である。

幣帛奉奠後、五丈殿において直会にあたる“響膳”の儀が行われる。

午後二時には「古物渡」こもつわたし。古殿内に奉納されていた神宝類を新宮西宝殿に移す儀式である。

午後五時、御神楽に先立ち大御饌を奉る「御神楽御饌」が行われ、御神楽の奉納を大御神に奉告する。

そして遷御諸祭行事の三十三番目、有終の美を飾るのが「御神楽」である。

秋の日が落ちた午後七時、新宮四丈殿において宮内庁の楽師により御神楽と秘曲の奉奏が始まる。

神へ捧げるその調べは庭燎の灯りが揺れるなか、夜の更けるまで奏でられる。

二十年に一度の盛儀への祝意と無窮の念をこめて…。

平成十七年五月二日山口祭に始まり、八年余りをかけてすすめてきた第六十二回神宮式年遷宮が幕を閉じた。

そして内宮の第一別宮「荒祭宮」で十月十日、遷御の儀が斎行された。

「荒祭宮」は天照大御神の荒御魂をまつる最も格式の高い別宮で、祭儀も正宮に準じて行われている。続いて十月十三日、外宮の第一別宮「多賀宮」でも遷御の儀が行われ、他の十二の別宮は平成二十七年中には順次新たな社殿に遷る。

神宮式年遷宮は三十三の諸祭行事が繰り広げられる。その諸祭行事は造営祭と遷宮祭に大別される。さらに造営祭は御用材調達に関わる「山作り」、新宮御敷地内での造営に関わる「庭作り」に、また、大御神が新宮へ遷られる最も重要な祭である遷宮祭も前儀と後儀に分かれる。そのすべての祭は約千三百年前、持統天皇の四年（690年）、第一回の御遷宮が行われて以来二十年に一度繰り返され継承されてきたのである。

悠久の歴史をもちながら神宮が常に瑞々しい姿を保つのは式年遷宮による。それは新たに生まれ変わる常若への歩み——。時空を超えて受け継がれてきた永遠の祈りである。

11月——。

神宮の森は錦のように染め上げられる。
五十鈴川の水面は燃えているかのように紅葉で覆われる。

御垣内に並び立つ二つの社殿。
ひっそりと佇むのは歴史を紡いできた古い社殿。
新しい社殿は真っ白なお白石の敷き詰められた御敷地で輝きを放つ。
やがて新旧二つの社殿は新しい年を迎える。
過去と未来…、そして現在。
すべてのことは永遠に繰り返される。

二十年後、次の遷宮のとき、
あなたは何をしていますでしょうか…？

・この文章は遷宮に関する資料を参考にしました。
伊勢新聞 2013年10月2日記事、読売新聞 2013年10月2日記事、「伊勢神宮のこころ、式年遷宮の意味」小堀邦夫／著 淡交社
「伊勢神宮 悠久の歴史と祭り」別冊太陽 清水潔／監修 平凡社

図書館だよりNo.141 増刊 平成25(2013)年11月1日発行

(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者／株式会社 図書館流通センター (住所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町13-35
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2013 mami ishikura